

# 印度更紗

泉鏡花

青空文庫



「鸚鵡さん、しばらくね……」

と真紅へ、ほんのりと霞をかけて、新しい火の※と移る、棟  
 瓦が夕春日を噛んだ状なる瓦斯暖炉の前へ、長椅子を斜に、  
 ト裳を床。上草履の爪前細く※娜に腰を掛けた、年若き夫人  
 が、博多の伊達巻した平常着に、お召の紺の雨 紺の羽織ばかり、繕はず、等閑に引被けた、其の姿は、敷詰めた絨氈の  
 浮出でた綾もなく、袖を投げた椅子の手の、緑の深さにも押し沈  
 められて、消えもやせむと淡かつた。けれども、美しさは、夜の

雲こずえに暗く梢おほを蔽はれながら、もみぢの枝の裏透うらすくばかり、友染ゆうぜんの紅くれなゐちらくくと、櫛くし巻まきの黒髪くろかみの濡色ぬれいろの露つゆも滴したたる、天井てんじやう高き山の端はに、電燈でんとうの影白かげしろうして、揺ゆめく如ごとき暖炉だんろの焰ほのおは、世に隠れたる山やま姫ひめの錦にしきを照らす松たいまつ明あきらかと冴さゆ。

博士はかせが旅行たびをした後あとに、交際つきあいぎらひで、籠勝こもりがちな、此この夫おとこ人が留守留守した家は、まだ宵よいの間まも、實際じつた蔦つたの中に所在ありかの知しる、山や家の如ごとき、窓まど明あかり。

広い住居すまいの近所きんじよも遠し。

久しぶりで、恚こうして火かを置かせたまゝ、氣きに入りの小間使こまじさへ遠とほざけて、ハタと扉ひらきを閉とぎした音こたまが、飴あまするまで響ひびいたのであつた。

夫人は、さて唯一人、壁に寄せた塗棚に据置いた、籠の中なる、雪衣の鸚鵡と、差向ひに居るのである。

「御機嫌よう、ほゝゝ、」

と荅を含んだ趣して、鸚鵡の雪に照添ふ唇……

籠は上に、棚の丈稍高ければ、打仰ぐやうにした、眉の優しさ。鬢の毛はひたくと、羽織の襟に着きながら、肩も頸も細かつた。

「まあ、挨拶もしないで、……黙然さん。お澄ましですこと。

……あゝ、此の間、鳩にばかり構つて居たから、お前さん、一寸お冠が曲りましたね。」

此の五日六日、心持煩はしければとて、客にも逢はず、二

階の一室に籠りツ切、で、寢起の際には、裏庭の松の梢高き、城のもの見のやうな窓から、雲と水色の空とを観ながら、徒然にさしまねいて、蒼空を舞ふ遠方の伽藍の鳩を呼んだ。——真白なのは、掌へ、紫なるは、かへして、指環の紅玉の輝く甲へ、朱鷺色と黄の脚して、軽く来て留るまでに馴れたのであつた。

「それく、お冠の通り、嘴が曲つて来ました。目をくるく…  
…でも、矢張り可愛いねえ。」

と艶麗に打傾き、

「其の替り、今ね、寝ながら本を読んで居て、面白い事があつたから、お話をして上げようと思つて、故々遊びに来たんぢやないか。途中が寒かつたよ。」

と、犇ひしと合はせた、両りよう袖そで堅かたく緊しまつたが、溢こぼるゝ蹴けだ出し柔か  
に、褻つまが一ひと靡なびき落着おちいて、胸むねを反そらして、顔かほを引き、

「否いいえ、まだ出して上げません。……お話を聞きかなくツちや……で  
ないと袖そでを啣くわへたり、乗のりつたり、悪いた戯ずらをして邪じや魔まなんですもの。  
お聞きなさいよ。

可いいかい、お聞きなさいよ。

まあ、ねえ。

座敷は——こんな貸家かしゃだて建たちやありません。壁かべも、床とこも、皆さ彩さい  
色いろした石いしを敷しいた、明あけ放はなした二階にの大広間おほひろま、客室きやくまなんです。  
外面おもての、印度洋インドに向むかいた方の、大理石たいりしの廻まわり縁えんには、軒のきから掛か  
けて、床ゆかへ敷しく……水晶すいせいの簾すだれに、星ほしの数々ちりば鏤ろうめたやうな、ぎやま

んの燈籠とうろうが、十五、晁々きらきら点ついて並んで居まます。草花くさばなの絵ゑの  
蠟燭ろうそくが、月の桂かつらの透かくやうに。」  
と襟えりを庄おさへた、指ゆびの先さき。

## 二

引合ひきあはせ、又袖そでを当あて、

「丁ちようど、まだ灯あかしを入いれたばかりの暮くれ方がたでね、……其たかの高か楼どのか  
ら瞰みお下みろさされる港みなとぐち口ぐちの町まちどおり通とほには、焼しょう耐ちゆう売うりだの、雜あぶらうり  
貨屋あぶらうりだの、油あぶら売うりだの、肉屋にくやだの、皆みな黒くろ人んぼに荷車ひまを曳ひかせ  
て、……商人あきんどは、各お自んに、ちやるめらを吹ふく、さゝらを摺する、

鈴ベルを鳴らしたり、小太鼓を打つたり、宛然まるでお神楽かぐらのやうなんです  
 がね、家うちが大きいから、遠くに聞えて、夜中の、あの魔もののお囃は  
 子やし見たやうよ、……そして車に着いた商人あきんどの、一人々々、穂長ほなが  
 の槍やりを支ついたり、担かついだりして行く形が、ぞろ／＼影のやうに黒  
 いのに、椰子やしの樹きの茂つた上へ、どんよりと黄色に出た、月あかりの明  
 で、白刃しらはばかりが、閃々ぴかぴか、と稲妻いなずまのやうに行交ゆきかはす。  
 其の向うは、鰐わにの泳ぐ、可恐おそろしい大河おおかわよ。……水みな上なみは幾いくせ  
 千里千里だか分らない、天竺てんじくのね、流沙河りゅうさがわの末すえだとき、河幅が  
 三里の上、深さは何百尋なんびやくひろか分りません。  
 船のある事……帆柱ほぼしらに巻着まきついた赤い雲は、夕日の余波なごりで、鰐  
 の口へ血の晩御飯つぎいを注込つぎこむんだわね。

時は十二月なんだけれど、五月のお節句の、此は鯉、其は金銀

の糸の翼、輝く虹を手鞠てまりにして投げたやうに、空を舞つて居た孔く

雀じやくも、最もう庭へ歸つて居るの……燻たきし占めはせぬけれど、棚に飼

つた麝香猫じやくこうねこの強い薫かおりが芬ぶんとする……

同おなじやうに吹ふき通とおしの、裏は、川筋を一つ向うに、夜中は尾長おながぎ

猿るが、キツキと鳴き、カラ／＼カラと安達ヶ原あだち はらの鳴子のやうな、

黄金蛇こがねへびの音がする。椰子やし、檳榔子びんろうじの生え茂つた山に添つて、

城のやうに築つきあ上げた、煉瓦造れんがづくりがづらりと並んで、矢間やざまを切つた

黒い窓から、弩いしびやの口がづん、と出て、幾つも幾つも仰向あおむけに、星

を呑のまうとして居るのよ……

オランダオランダ人の館やかたなんです。

其ひとつのひとつの、和蘭館オランダかんの貴公子と、其の父親の二人が客で。卓テエブ  
 子の青い鉢、青い皿を囲むきあんで向合むきあつた、唐人とうじんの夫婦が二人。  
 別に、肩には更紗さらさを投掛なげかけ、腰に長剣を捲まいた、目の鋭い、裸はだかの  
 筋骨きんこつの引緊ひきしまつた、威風の凜々りんりんとした男は、島の王様のやう  
 なものなの……

周圍まわりに、可いいほど間まを置いて、黒人くろんぼの召使つしが三人で、謹つつしんで  
 給仕給仕に附ついて居る所。」  
 と俯目ふしめに、睫毛まつげ濃く、黒棚くろだなの一ツひとつの仕劃しきりを見た。袖口そでぐち白く  
 手を伸のべて、

「あゝ、一人ひとり此処ここに居たよ。」  
 と言いふ。天窓あたまの大きな、頤あごのしやくれた、如法にょほう玩弄おもちゃの焼やきも

の、ペロリと舌で、西瓜喰ふ黒人の人形が、ト赤い目で、額  
 で睨んで、灰色の下唇を反らして突立つ。

「……余り謹んでは居ないわね……一寸、お話の中へ出てお  
 いで。」

と手を掛けると、ぶるりとした、貧乏動ぎと云ふ胴揺りで、  
 ふてくされにぐらくくと拗身に震ふ……はつと思ふと、左の足が  
 股のつけもとから、ぽきりと折れて、ポンと尻持を支いた体に、  
 踵の黒いのを真向きに見せて、一本ストンと投出した、……恰も  
 可、他の人形など一所に並んだ、中に交つて、其処に、木彫に  
 うまごやしを萌黄で描いた、舶来ものの靴が片隻。

で、肩を持たれたまゝ、右の跛の黒どのは、夫人の白魚の細

い指に、ぶらりと掛つて、一ツ、卜前のめりに泳いだつけ、臀を揺つた珍な形で、けろりとしたもの、西瓜をがぶり。

熟と視て、

「まあ……」

離すと、可いことに、あたり近所の、我朝の姉様を仰向に抱込んで、引くりかへりさうで危いから、不気味らしくも手からは落さず……

「島か、光か、私を掛けて——お待ちよ、否、然うく……矢張これは、此の話の中で、鰐に片足食切られたと云ふ土人か。人殺しをして、山へ遁げて、大木の梢へ攀ぢて、枝から枝へ、千仞の谷を伝はる処を、捕吏の役人に鉄砲で射られた人だよ。

ねえ鸚鵡おうむさん。」

と、足を継ついで、籠かごの傍わきへ立掛たてかけた。

鸚鵡の目こそ輝いた。

三

「あんな顔をして、」

と夫人は声を沈めたが、打仰うちあおぐやうに籠かごを覗のぞいた。

「お前さん、お知ちかづき己おのれぢやありませんか。尤もつとも御先祖おんせんぞの頃だらう

けれど——其そのの黒人くろんぼも……和蘭陀人オランダも。」

で、木彫きでんの、小さな、護謨ゴム細工さいくのやうに柔かに襞ひだの入いつた、

靴をも取つて籠の前に差置さしおいて、

「此のね、可愛らしいのが、其の時の、和蘭陀館オランダやかたの貴公子ですよ。御覽、——お待ちなさいよ。恚こうして並べたら、何だか、もの足りないから。」

フト夫人は椅子を立つたが、前に挟んだ伊達卷だてまきの端をキウと緊しめた。絨じゅうたん 氈たんを運ぶ上靴は、雪に南天なんてんの实みの赤きを行く……

書棚を覗のぞいて奥を見て、抽出ぬきだす論語の第一卷——邸やしきは、置場所のある所とさへ言へば、廊下の通かよいぐち口も二階の上うえ下も、ぎつしりと東西の書もつの揃そろつた、硝子戸がらすどに突つき当あたつて其から曲る、……本箱いっの五ツ七ツななが家の五丁目七丁目ななで、縦じゅうおう横おうに通ずるので。……この此の書棚の上には、花は丁ちようど挿さしてなかつた、——

―手附てつきの大形はなかげの花籠はなかごと並べて、白木しろきの桐きりの、軸ねじりものの箱はこが三ツみつばかり。其の真中の蓋ふたの上に……

恚こう仰ぎようぎよう々ううしく言出いいだすと、仇かたきの髑しやれ髑こうべか、毒藥どくやくの瓶びんか、と

驚おどろかれよう、真ま個ごとくの事ことを言いひませう、さしたる儀ぎでない、紫むらさきの

切きれを掛かけたなりで、一尺三寸しやくさん、一口ひとくちの白鞆しらさやものの刀やいばがある。

と黒目くろめがち勝かちな、意味いみの深ふかい、活いき々いきとした瞳ひとみに映うつると、何思なにおもひ

けむ、紫むらさぐるみ、本ほんに添そへて、すらすらと持つて椅子いすに帰かえつた。

其そのだけで、身みの悩なやましき人ひとは吻くちと息いきする。

「さあ、此このの本ほんが、唐もろこし土この人ひと……揃そろつたわね、主人しゅじんも、客きやくも。

而そして鰐わにの晩飯ばんぱん時とき分ぶん、孔くしやく雀くわくのやうな玉たまの燈籠とうろうの裡うちで、御馳ごち

走そうを会食かいじきして居ゐる……

ちよいと  
一寸、其の高楼たかどのを何処どこだと思ひます……印度インドの中のね、蕃ば  
んじやらあまん  
蛇刺馬ふなつき……船着ふなつきの貿易所、——お前さんが御存じだよ、私

よいか、」

と打微笑うちほほえみ、

「主人しゆじんは、支那しなの福州ふくしゅうの大商賈おおあきんどで、客は、其も、和蘭陀オランダ  
かねもちおやこ  
の富豪父子ふごうふしとと、此の島の酋長しゅうちやうなんですがね、こゝでね、皆みんな  
がね、たゞ一ツひと、其だけに就ついて繰返して話して居たのは、——

此のね、酋長しゆちやうの手から買取つて、和蘭陀の、其の貴公子が、此の  
家へ贈りものにした——然そうね、お前さんの、あの、御先祖と云  
ふと年寄染としよりじみます、其の時分は少わかいのよ。出が王様の城だから、  
姫君の鸚鵡おうむが一羽いちわ。

全身緋色ひいろなんだつて。……

此が、哥太寛こたいかんと云ふ、此家ここの主人あるじたち夫婦の秘蔵娘で、今年十八に成る、哥鬱賢こうつけんと云うてね、島第一の美しい人のものにつたの。和蘭陀の公子は本望ほんもうでせう……実は其が望みだつたらしいから——

鸚鵡は多年馴ならしてあつて、土地の言語は固もとよりだし、瓜哇ジャワ、勃泥ボルネオの訛なまりから、馬尼刺マニラ、錫蘭セイロン、沢山たんとは未だまなかつた、英吉利イギリスの語も使つて、其は……伶俐りこうな娘をはじめ、誰にも、よく解るのに、一ツ人ひとの聞馴ききなれない、不思議な言語ことばがあつたんです。

以前の持主、二度目のはお取次とりつぎ、一人も仕込んだ覚えはないから、其の人たちは無論の事、港へ出入る、国々島々のものに尋

ねても、まるつきし通じない、希けう有な文句を歌ふんですがね、検しらべて見ると、其が何なの、此の内へ来てから、はじまつたと分つたんです。

何かの折の御馳走に、哥こた太寛たいかんが、——今夜だわね——其の人たかどのまねたちを高楼たかどのまねに招いて、話の折に、又其の事を言い出して、鸚鵡おうむの口真似もしたけれども、分らない文句は、鳥の声とばツかし聞えて、傍そばで聞く黒くろんぼ人たちも、妙な顔かお色つぎで居る所……ね……

其処そこへですよ、奥深く居て顔は見せない、娘の哥こ鬱う賢けんから、  
こしもとが一人使者つかいで出ました……」

## 四

「差出がましようござんすが、お座興にもと存じて、お客様の前ながら、申上げます、とお嬢様、御口上。——内に、日本と云ふ、草くさむしり 雀おの若い人が居りませう……ふと思ひ着きました。あのものをお召し遊ばし、鸚鵡の謎なぞをお問合はせなさいましては如何かがでせうか、と其のこしもとのが陳べたんです。

鸚鵡は、尤もつとも、お嬢さんが片かたとき時も傍そばを離さないから、席へ出ては居なかつたの。

でね、此を聞くと、人の好いい、気の優いしい、哥太寛ごしんぞの御新姐ごしんぞが、おう、と云つて、袖そでを開ひらく……主人もはた、と手を拍うつて、「  
とて、夫人は椅子なる袖に寄せた、白しらさや鞆たもとを軽くおき圧おさへながら、

「先刻せんこくより御覧に入れた、此なる劍つるぎ、と哥太寛の云つたのが、  
 — 卓子テエブルの上に置いた、蠟塗ろうぬり、鮫鞆卷さめざやまき、縁頭ふちがしら、目貫めぬきも  
 揃そろつて、金銀造りの脇差わきざしなんです——此の日本の劍と一所につるぎ いっしょ  
 ミンダネオの土蛮どばんが船に積んで、売りに参つた日本人を、三年前にさき  
 泯汰腦の土蛮が船に積んで、売りに参つた日本人を、三年前にさき  
 買取かいとつて、現に下僕かほくとして使ひます。が、傍そばへも寄せぬ下したばた  
 働らきの漢おとこなれば、劍は此処こゝにありながら、其の事とも存ぜなんだ。  
 ……成程なるほど、呼べ、と給仕を遣やつて、鸚鵡を此へ、と急いで嬢に、  
 で、こしもとを立たせたのよ。

たゞ玉たまの緒おのしるしばかり、髪は糸で結んでも、胡沙吹く風は  
 肩に乱れた、身は痩やせ、顔は窶やつれけれども、目鼻立ちの凜りんとして、  
 口許くちもとの緊しまつたのは、服装なりは何どうでも日本の若草やまとわかぐさ。黒人の給くろんぼ

仕に導かれて、燈籠とうろうの影へ顕あらわれたつけね——主人の用に商売あきないものを運ぶ節は、盗賊どろぼうの用心きつに屹きつと持つ……穗長ほながの槍やりをねえ、こんな場所へは出つけないから、突立つきたてたまゝで居るんぢやありませんか。

オランダオランダ和蘭陀オランダのは騒さわがなかつたが、蕃蛇刺馬ばんじやらあまんの酋しゆう長ちようは、帯を手繰たぐつて、長劍つがの柄つかへ手を掛かけました。……此のお夥間なかもです……人の売買うりかいをする連れんじゆう中は……まあね、槍やりは給仕あわが、此も慌あわてて受取うけとつたつて。

静かに進んで礼をする時、牡丹ぼたんに八ツ橋やを架かけたやうに、花の中を廻り繞めぐつて、奥へ続ついた高樓たかどのの廊下くろめこしもとづたひに、黒女くろめのが前後あとしきに三人属ついて、浅あさみどり緑きぬの衣もに同じ裳もをした……面おもては、雪

の香が沈む……銀の櫛照々と、両方の鬢に十二枚の黄金の簪、玉の瓔珞はらくくと、お嬢さん。耳鉗、腕釧も細い姿に、拔出るらしく鏘々として……あの、さらくと歩行く。

母親が曲きよくろくを立つて、花の中で迎へた処で、哥鬱賢は立停

まつて、而して……桃の花の重つて、影も染まる緋色の鸚鵡は、

お嬢さんの肩から翼、翻然と母親の手に留まる。其を持つて、卓

エブルエブル子に帰つて来る間に、お嬢さんの姿は、の三ツの黒い中に隠

れたんです。

鸚鵡は誰にも馴染だわね。

卓テエブル子の其処へ、花片の翼を両方、燃立つやうに。」

と云ふ。声さへ、其の色。暖炉の瓦斯は颯々と霜夜に冴えて、

一層殷紅いんこうに、且つ鮮麗せんれいなるものであつた。

「影を映した時でした……其の間に早や用の趣おもむきを言ひ聞かされた、髪かみの長い、日本の若い人の、熟じつと見るのと、瞳ひとみを合せたやうだつ

たつて……

若い人の、窶やつれ顔に、血の色が颯さつと上つて、——国々島々、方々が、いづれもお分りのないとある、唯一ただ句、不思議な、短かい、鸚鵡わたくしの声と申すのを、私が先へ申して見ませう……もしや？……

——港で待つよ——

と、恚こう申すのではござりませぬか、と言ひも未だ果まてなかつたに、島の毒蛇どくじやの呼吸いきを消して、椰子やしの峰、鰐わにの流ながればんじやらあ、蕃蛇ばんじやらあ刺馬まんの黄色な月も晴れ渡る、世にも朗ほがらかな涼すずしい声して、

——港で待つよ——

と、羽はねを靡なびかして、其ひの緋鸚鵡おうむが、高らかに歌つたんです。

釵かんざしの揺ゆぐ氣勢けいはいは、彼方あちらに、お嬢さんの方かたにして……卓テ子エブルの其そのの周囲まわりは、却かえつて寂ひっそり然ひっそりとなりました。

たゞ、和蘭陀オランダの貴公子きこうしの、先刻さつきから娘むすめに通とほはす碧あゐを湛たたへた目の美うつくしさ。

はじめて鸚鵡おうむに見返みかへして、此この言葉ことばよ、此この言葉ことばよ！日本にっぽん、と真前まつききに云いひましたとき。」

五

「真個、其の言に違はないもんですから、主人も、客も、座を正して、其のいはれを聞かうと云つたの。」

——港で待つよ——

深夜に、可<sup>おそろし</sup>恐<sup>こがねへび</sup>い黄金蛇の、カラ〜と這<sup>は</sup>ふ時は、土蛮<sup>どばん</sup>でさへ、誰も皆耳を塞<sup>ふさ</sup>ぐ……其の時には何<sup>ど</sup>うか知らない……そんな果<sup>は</sup>敢<sup>かな</sup>い、一生<sup>どれい</sup>奴隷に買はれた身だのに、一度も泣いた事を見ないと云ふ、日本の其の少<sup>わか</sup>い人は、今其<sup>そ</sup>の鸚鵡<sup>ひとこと</sup>の一<sup>ひとこと</sup>言<sup>こと</sup>を聞か聞かないに、槍<sup>やり</sup>をそばめた手も恥かしい、ぼつたり床<sup>ゆか</sup>に、俯<sup>うつむ</sup>向けに倒れて濟<sup>さめざめ</sup>々と泣くんです。

お嬢さんは、伸<sup>のびあが</sup>上<sup>あ</sup>るやうに見えたの。

涙を払つて——唯今の鸚鵡<sup>おうむ</sup>の声は、私<sup>わたくし</sup>が日本の地を吹<sup>ふきなが</sup>流<sup>なが</sup>され

て、恁こうした身に成ります、其の船出の夜中に、歴あり然と聞きま  
 した……十二じゆうにひとえ一重に緋はの袴かまを召させられた、百人一首と云ふ歌  
 の本において遊ばす、貴あなた方方にはお解りあるまい、尊い姫君の  
 絵姿おもかげに、面影おもかげの肖にさせられた御方おかたから、お声こゑがかりがありまし  
 た、其の言葉に違ひありません。いま赫かくやく耀とした鳥の翼を見ま  
 すると、射いらるゝやうに其の緋の袴が目に見えたのでござります。  
 ——と此から話したの——其の時は、船ふねの女おんな神なごみさまのお姿  
 だつたんです。

若い人は筑ちく前ぜんの出生うまれ、博多の孫まご一いちと云ふ水主かこでね、十九の  
 年、……七年前、福岡藩の米を積んだ、千六百石こくの大船たいせんに、乗の  
 りりくみ組にんずの人数、船頭とも二十人、宝曆ほうれき午うまの年十月六日に、伊勢丸いせまる

と云ふ其の新造しんぞうの乗初のりぞめです。先づは滞りなく大阪へ——それから豊前ぶぜんへ廻つて、中津なかつの米を江戸へ積んで、江戸から奥州へ渡つて、又青森から津軽藩の米を託ことづかつて、一度品川まで戻つた処ところ、更あらためて津軽の材木を積むために、奥州へ下つたんです——其の内、年号は明和めいわと成る……元年申さるの七月八日、材木を積済つみすまして、立たつびことまり火の小泊ひらから帆を開いて、順風に沖へ走り出した時、一人にんやぐら、櫓こから倒さかさまに落ちて死んだのがあつたんです、此があやかしの憑ついたはじめなのよ。

南部さいうらの才浦さいうらと云ふ処ところで、七日ばかり風待かぎまちをして居た内に、長ちようはち八ちようはちと云ふ若い男が、船宿ふなやど小宿こやどの娘なと馴染なじんで、明日あすは出しゆつばん、と云ふ前の晩、手に手を取つて、行方も知れず……一ちよい

と寸……駢落かけおちをしてしま了つたんだわ！」

ふと蓮葉はすはに、ものを言つて、夫人はすつと立つて、対丈ついたけに、  
黒人くろんぼの西瓜すいかを避けつゝ、鸚鵡かごの籠かごをコトくと音信おとずれた。

「何どう？多分そ其の我まゝな駢落ものの、……私は子孫だ、と思ふ  
んだがね。……御覧の通りだからね、」

と、霜しもの冷つめたい色して、

「でも、駢落ちをしたお底かけで、無事に生命いのちを助かつたんです。思  
つた同士は、道行きみちゆに限るのねえ。」

と力ちからなささうに、疲れたらしく、立たち姿すがたのなり、黒棚くろだなに、  
柔そでかな袖を掛けたのである。

「あとの大勢つたら、其のあくる日から、火の雨、火の風、火の

浪なみに吹放ふきはなされて、西へ——西へ——毎日々々、百日と六日あいだの間、

鳥の影一つ見えない大灘おおなだを漂うて、お米を二升しょうに水一斗との薄うすが

粥ゆで、二十人の一日の生命いのちを繫つないだのも、はじめの内。くまび

きさへ釣つれないもの、長い間あいだに漁したものは、一尋ふたひろばかりの鱭ふかが

一疋びき。さ、其を食たべた所せい為なでせう、お腹なかの皮が蒼白あおしろく、鱻ふかのや

うにだぶだぶして、手足は海松みるの枝の枯れたやうになつて、漸やつ

と見つけたのが鬼ヶ島おにしま、——魔界まがいだわね。

然そうして地つちを見てからも、島の周圍まわりに、底から生なえて、幹みきばか

りも五丈じょう、八丈、すくくと水から出た、名も知れない樹が邪魔

に成つて、船を着ける事が出来ないで、海の中の森あいだの間を、潮あ

かりに、月も日もなく、夜よる昼ひる七日流なれたつて言いふんですもの：

：

其の時分、大きな海鼠なまこの二尺許にしやくばかりなのを取つて食べて、毒に  
 当つて、死なないまでに、こはれごはれの船の中で、七顛しちてん八ぱつと  
 倒うの苦痛くるしみをしたつて言ふよ。……まあ、どんな、心こころ持もちだ  
 つたらうね。渴くのは尚なほ辛つらくつて、雨のない日の続く時は帆布ほぬの  
 を拈よつげて、夜露よつゆを受けて、皆みんなが口をつけて吸つたんだつて——大  
 概唇は破れて血が出て、——助まごかつた此の話の孫まご一いちは、余あんまり激  
 しく吸つたため、前齒二つ反そつて居たとき。……  
 お聞き、島へ着くと、元もと船ぶねを乗のり棄すてて、魔国まこくとこゝを覚悟し  
 て、死装束しにしようぞくに、髪なでつを撫な着つけ、衣類きを着き換かへ、羽織ひもを着ひもて、紐  
 を結んで、てん／＼がひとこし一腰ひとこしづゝ嗜たしなみの脇わき差さをさして上陸あがつ

たけれど、飢渴<sup>うきかつ</sup>ゑた上、毒に当つて、足腰も立たないものを何<sup>ど</sup>う  
 しませう？……」

六

「三百人ばかり、山手<sup>やまて</sup>から黒煙<sup>くろけぶり</sup>を揚げて、羽蟻<sup>はあり</sup>のやうに渦卷  
 いて来た、黒人<sup>くろんぼ</sup>の槍<sup>やり</sup>の石突<sup>いしづき</sup>で、浜に倒れて、呻吟<sup>うめ</sup>き悩む一人  
 々が、胴、腹、腰、背、コツくと突<sup>つ</sup>かれて、生<sup>いき</sup>死<sup>し</sup>を験<sup>ため</sup>され  
 ながら、抵抗<sup>てむかい</sup>も成<sup>な</sup>らず裸<sup>はだか</sup>にされて、懐中ものまで剥取<sup>はぎと</sup>られた上、  
 親船<sup>おやぶね</sup>、端舟<sup>はしけ</sup>も、斧<sup>おの</sup>で、ばらばらに摧<sup>くだ</sup>かれて、帆綱<sup>ほづな</sup>、帆柱<sup>ほばしら</sup>、離れ  
 た釘は、可忌<sup>いまわし</sup>い禁厭<sup>まじない</sup>、可恐<sup>おそろし</sup>い呪詛<sup>のろい</sup>の用に、皆奪<sup>みんなと</sup>られて了<sup>しま</sup>つ

たんです。……

あとは残らず牛馬扱ひ。それ、草を雀れ、馬鈴薯を掘れ、  
 貝を突け、で、焦げつくやうな炎天、夜は毒蛇の霧、毒虫の  
 霧の中を、鞭打ち鞭打ち、こき使はれて、三月、半歳、一年と  
 云ふ中には、大方死んで、あと二三人だけ残つたのが一人々々、  
 牛小屋から掴み出されて、果しも知らない海の上を、二十日目に  
 島一つ、五十日目に島一つ、離れ／＼に方々へ売られて奴隷に  
 成りました。

孫一も其の一人だつたの……此の人はね、乳も涙も漲り落ち  
 る黒女の俘囚と一所に、島々を目見得に廻つて、其の間には、  
 日本、日本で、見世ものの小屋に置かれた事もあつた。一度何処

か方角も知れない島へ、船が水汲みずくみに寄つた時、浜つゞきの椰子やしの樹の奥に、恚こうね、透かすと、一人、コトンくと、寂さびしく粟あわを搗ついて居た亡者もうじやがあつてね、其なが夥間なの一人だつたのが分つたから、声を掛けると、黒人くろんぼが突倒つきたおして、船は其のまゝ朱しゆい色ろの海へ、ぶくくと出たんだとさ……可哀相あわれねえ。

まだ可哀あわれなのはね、一いっしょ所に連廻つれまはられた黒女くろめなのよ。又何なとか云ふ可恐おそろしい島でね、人が死ぬ、と家属かぞくのものが、其の首は大お事に蔵しまつて、他人の首を活いきながら切つて、死人の首へ継合つぎあはせて、其を埋うずめると云ふ習慣ならわしがあつて、工面くめんのいゝのは、平常ふだんから首代くびしろの人間を放飼はなしがい飼いに飼つて置く。日本ぢや身がはりの首と云ふ武士道とかがあつたけれど、其の島ぢや遁にげると不可いけないか

らつて、足を縛つて、首から掛けて、またあいだ股の間へ鉄のふんどう分銅を釣る  
 んだつて……其そこ処へ、あの、黒い、乳の膨れた女は買はれたんだ  
 よ。

孫一は、天の助けか、其の土地では売れなくつて——とうく  
ばんじやらあまん蕃蛇刺馬で方かたが附いた——

と云ふ訳なの……

話は此なんだよ。」

夫人は小さな吐息した。

「其そのね、ね。かなし可憐い、おそろし可恐い、滅亡の運命が、人たちの身に、  
あらし暴風雨と成つて、天地とともにくずれかか崩掛らうとする前よるの夜、……  
なぎ風はよし、風はよし……船出の祝ひに酒盛したあと、船中残らず、

ぐつすりと寝込んで居た、仙台の小淵の港で——霜の月に独り覚めた、年十九の孫一の目に——思ひも掛けない、艫ともの間の神龕かみだなの前に、凍こおつた竜宮の几帳きちようと思ふ、白氣はつきが一筋ひとすじ月に透いて、向うへ大波うねが畝かさなるのが、累すざつて凄く映る。其の蔭に、端麗あでやかさも端麗あでやかに、神々こうこうしさも神々しい、緋はかまの袴はかまの姫ひめが、お一方ひとかた、孫一ひつとを一目見なすつて、

——港で待つよ——

と其の一言ひとこと。すらりと背後うしろ向かるゝ黒髪くろかみのたけ、帆柱ほぼしらより長く靡なびくと思ふと、袴もすその裳ぶかが波なみを摺すつて、月の前を、さらりと、かけ波しづきの沫うめの玉たまを散らしながら、衝つと港みなとぐち口くちへ飛んで消えるのを見ました……あつと思ふと夢は覚さめたが、月明りに霜うすけぶの薄煙うすけぶ

りがあるばかり、船の中に、尊い香の薫が残つたと。……

此の船中に話したがね、船頭はじめ——白痴め、婦に誘はれて、  
かけおち 駈落の真似がしたいのか——で、船は人ぐるみ、そ 然うして奈落  
さかさまおちこ へ逆に落込んだんです。

まあ、何と言はれても、美しい人の言ふことに、従へば可かつ  
 たものをね。

七年いくつき 幾月の其の日はじめて、世界を代へた天竺てんじく の蕃蛇ばんじやらあ  
まん 刺馬の黄昏たそがれ に、緋の色した鸚鵡おうむ の口から、同じ言を聞いたの  
なげふ で、身を投臥して泣いた、と言ひます。

いみじ 微妙き姫神ひめがみ、余りの事の靈威うた に打れて、一座ひざまず 皆跪いて、東の  
 空を拝みました。

言ふにも及ばない事、奴隸の恥も、苦みも、孫一は、其の座で解けて、娘の哥鬱賢が、賸した其の鸚鵡を肩に据ゑて。」

と籠を開ける、と翻然と来た、が、此は純白雪の如きが、嬉し

さに、颯と揚羽の、羽裏の色は淡く黄に、嘴は珊瑚の薄紅。

「哥太寛も餞別しました、金銀づくりの脇差を、片手に、」

と、肱を張つたが、撓々と成つて、紫の切も乱るゝまゝに、弛

き博多の伊達巻へ。

肩を斜めに前へ落すと、袖の上へ、腕が這つた、……月が投げ

たるダリヤの大輪、白々と、揺れながら戯れかゝる、羽交の

下を、軽く手に受け、清しい目を、熟と合はせて、

「……あら嬉しや！三千日の夜あけ方、和蘭陀の黒船に、旭を

載せた鸚鵡おうむの緋の色。めでたく筑前ちくぜんへ歸つたんです——

お聞きよ此を！ 今、現在、私のために、荒浪あらかなみに漂つて、蕃ば

蛇刺馬んじやらあまんに辛苦すると同じやうな少い人わかがあつたらね、——お前は何と云ふの！何と言ふの？

私は、其が聞きたいの、聞きたいの、聞きたいの、……たとへばだよ……お前さんの一言ひとことで、運命が極きまると云つたら、

と、息切れのする瞼まぶたが颯さつと、気を込めた手に力が入つて、鸚鵡の胸をお圧したと思ふ、嘴くちばしもがもが腕うでいて開あけて、カツキと嚙かんだ小指のひとふし一節ひとふし。

「あ、」と離すと、爪を袖そで口にぐち縫すがりながら、胸毛むなげを倒さかさに仰向あおむきかゝつた、鸚鵡の翼に、垂たらたらたらと鮮から血くれない。振離ふりはなすと、床ゆかまで

落ちず、宙ではらりと、影を乱して、黒<sup>くろ</sup>棚<sup>だな</sup>に、バツと乗る、と  
 驚<sup>おどろ</sup>駭<sup>き</sup>に衝<sup>つ</sup>と退<sup>す</sup>つて、夫人がひたと遁<sup>にげ</sup>構<sup>がま</sup>への扉<sup>ひら</sup>に凭<sup>き</sup>れた時であ  
 った。

呀<sup>やす</sup>！西<sup>い</sup>瓜<sup>か</sup>は投<sup>な</sup>げぬが、がつくり動いて、ベツカツコ、と目を剥<sup>む</sup>  
 く拍子に、前へのめらうとした黒<sup>くろ</sup>人<sup>ん</sup>の其<sup>の</sup>土<sup>ち</sup>人<sup>にん</sup>形<sup>ぎよう</sup>が、勢<sup>いき</sup>余<sup>おい</sup>  
 つて、どたりと仰<sup>の</sup>状<sup>げさま</sup>。ト木彫<sup>オランダ</sup>のあの、和蘭<sup>オランダ</sup>陀靴<sup>ダ</sup>は、スポンと裏  
 を見せて引<sup>ひ</sup>顛<sup>つくり</sup>返<sup>かえ</sup>る。……煽<sup>あ</sup>をくつて、論語<sup>あおり</sup>は、ばら〜と暖炉  
 に映<sup>か</sup>つて、赫<sup>かつ</sup>と朱<sup>そ</sup>を注<sup>そ</sup>ぎながら、頁<sup>ペエジ</sup>をひら<sup>ひら</sup>く。

雪<sup>ゆき</sup>なす鸚<sup>ひん</sup>鵒<sup>ど</sup>は、見る〜全身<sup>ぜんしん</sup>、美しい血<sup>ち</sup>に染<sup>そ</sup>つたが、目を眠<sup>ま</sup>  
 ばかり恍<sup>う</sup>惚<sup>と</sup>と成<sup>な</sup>つて、朗<sup>ほ</sup>かに歌<sup>うた</sup>つたのである。

——港<sup>みなと</sup>で待<sup>まち</sup>つよ——

時に立<sup>たち</sup>窘<sup>すく</sup>みつゝ、白<sup>しら</sup>鞞<sup>さや</sup>に思はず手を掛けて、以ての外<sup>ほか</sup>かな、  
 怪<sup>け</sup>異<sup>い</sup>なるものども<sup>の</sup>拳<sup>ふる</sup>動<sup>まい</sup>を屹<sup>き</sup>と視<sup>み</sup>た夫人<sup>が</sup>、忘れたやうに、柄<sup>つか</sup>  
 をしなやかに袖に捲<sup>ま</sup>いて、するりと帯に落して、片手におくれ毛  
 を払ひもあへず……領<sup>うな</sup>いて……莞<sup>にっこ</sup>爾<sup>り</sup>した。



# 青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成」 泉鏡花」 国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」 岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「中央公論」

1912（大正元）年11月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 印度更紗

## 泉鏡花

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>